# １９９２年度埋蔵文化財調査報告

長楽遺跡発掘調査報告
フジ山古墳測量調査報告
川合大塚山古墳発掘調査報告

１９９３年3月

河合町教育委員会

# 例　　言

1．本書は1992（平成４）年度国庫補助事業、県費補助事業として河合町教育委員会が実施した長楽遺跡・川合大塚山古墳の発掘調査及びフジ山古墳の測量調査の報告書である。

2．長楽遺跡の現地調査は、1992年10月26日に開始し、1992年10月29日をもって終了した。

フジ山古墳の現地調査は、1992年11月25日に開始し、1993年３月22日をもって終了した。

川合大塚山古墳の現地調査は、1992年11月27日に開始し、1992年12月９日をもって終了した。

3．調査組織は下記のとおりである。

調 査 主 体　河合町教育委員会

調査担当者　河合町教育委員会事務局　社会教育課　技師・吉村公男

調査事務局　河合町教育委員会事務局　社会教育課

教育長・浅芝辰夫(9／30まで)　教育長職務代行教育次長・藤川一昭(10／1から)

課長・西野宗次　係長・森井幸夫　主事・山口登美子、木戸正人、五島晃

調査作業員

長楽遺跡　……水田博三、中西靖男、北村勇、中原光男、笹原金造

大塚山古墳……水田博三、中西靖男、北村勇、中原光男、笹原金造、的場弘

調査補助員

長楽遺跡　…中山采子、小林美佐子

フジ山古墳…冨田眞二・広瀬時習・辻川哲朗・近藤玲・SAHUD, Eric（以上、同志社大学大学院)、道岸史子・門脇秀典・河森一浩（以上、同志社大学)、小林美佐子

大塚山古墳‥中山采子、小林美佐子

4．本書を作製するにあたり下記の諸機関ならびに諸氏のご指導・ご協力をいただいた。ここに記して謝意を表する。

奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所、奈良国立文化財研究所

泉森皎、河上邦彦、辰巳和弘、木場幸弘、前坂尚志、奥田尚、金原正明、牛嶋茂、橋本裕行、岡崎善之、富井徹、小山佳子、小西浩二、松井昌昭、生駒茂夫、生駒美知子、富井真一、富井和子、坂上健一、木下　亘　　（敬称略、順不同）

5．写真は航空写真を株式会社岡本組が撮影し、遺構及び遺物写真は一部を除き吉村が撮影した。

6．遺物の整理及び本書の作製は冨田、広瀬、辻川、近藤、Eric、門脇、中山、小林、及び末廣春枝があたった。

7．図１は平成４年修正版河合町全図(1:10,000)、図６・９は平成４年修正版河合町全図２・４（1:2,500)をもとに作製した。

8．本書の執筆・編集は吉村がおこなった。

# 本　文　目　次

1992年度の埋蔵文化財の調査について……1

**長楽遺跡発掘調査報告**

はじめに……3

調査結果……3

まとめ……5

**フジ山古墳測量調査報告**

はじめに……6

位置と環境……6

測量の方法……8

調査結果……9

まとめ……12

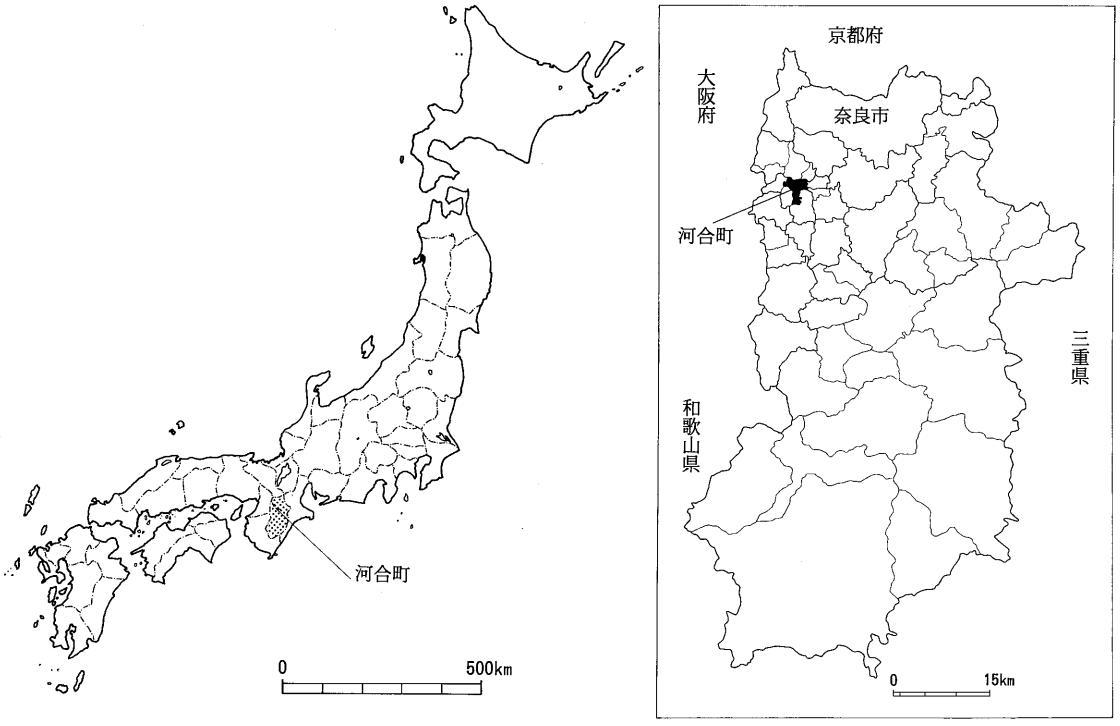
**川合大塚山古墳発掘調査報告**

はじめに……14

調査結果……15

まとめ……24

付記――坂上氏寄贈大塚山古墳の遺物について――……25




河合町の位置

# 図　目　次

**1992年度の埋蔵文化財の調査について**
図１　発掘・測量調査地位置及び周辺の遺跡分布図……2
**長楽遺跡**
図２　長楽遺跡調査地平面図……3
図３　長楽遺跡トレンチ土層図……4
図４　北トレンチ出土　石帯……5
図５　南トレンチ出土　遺物……5
**フジ山古墳**
図６　フジ山古墳位置図……7
図７　基準杭概念図……8
図８　フジ山古墳墳丘復原想定図……10
付図　フジ山古墳墳丘測量図
**川合大塚山古墳**
図９　川合大塚山古墳調査地位置図……14
図10　川合大塚山古墳調査地平面図……15
図11　川合大塚山古墳トレンチ平面及び土層断面図……17～18
図12　川合大塚山古墳南トレンチ出土　埴輪１……21
図13　川合大塚山古墳南トレンチ出土　埴輪２……22
図14　川合大塚山古墳南トレンチ出土　その他の遺物１……23
図15　川合大塚山古墳南トレンチ出土　その他の遺物２……24
図16　川合大塚山古墳　坂上氏寄贈　土師器・埴輪……26

# 写　真　目　次

**長楽遺跡**
写真１　調査地と箸尾遺跡＜左奥＞（北から）……3
**フジ山古墳**
写真２　フジ山と川合大塚山古墳群・島の山古墳（西上空から）……7
写真３　測量調査風景……8
写真４　墳丘＜左＞と掘割（南から）……9
写真５　墳頂部盗掘壙（北から）……10
写真６　墳丘（北東から）……11
写真７　葺石露出状況……11
**川合大塚山古墳**
写真８　調査地＜中央やや右＞と墳丘前方部端（西から）……15
写真９　南トレンチ近景（西から）……16
写真10　川合大塚山古墳墳丘と調査地＜左下＞（東上空から）……16
写真11　南トレンチ（西上空から）……19
写真12　調査地航空写真……19
写真13　川合大塚山古墳南トレンチ出土　埴輪、坂上氏寄贈土師器・埴輪……26

# 表　目　次

フジ山古墳測量トラバース成果表（単位：m）……8

# 1992年度の埋蔵文化財調査について

1992年度においては、長楽遺跡の範囲内にあたる河合町大字長楽字西口20番地及び、川合大塚山古墳の国史跡指定地に隣接する大字川合字城古垣内1150、1151番地の調査を行った。長楽遺跡については、住居建設に伴い事前調査として発掘調査を実施したものである。調査面積は約20㎡である。川合大塚山古墳については、調査地が国史跡指定地に隣接することから、住居建設に伴う事前調査として発掘調査を実施したものである。調査面積は約29㎡である。また、範囲確認調査として、河合町泉台（旧大字城内字フジ山）2074、1322－1、2079、2131番地に所在するフジ山古墳の測量調査を実施した。測量面積は約3,000㎡である。

以上の３件が国庫・県費による補助をうけ発掘・測量調査を実施したものであるが、この他、３件の立会調査をおこなった。

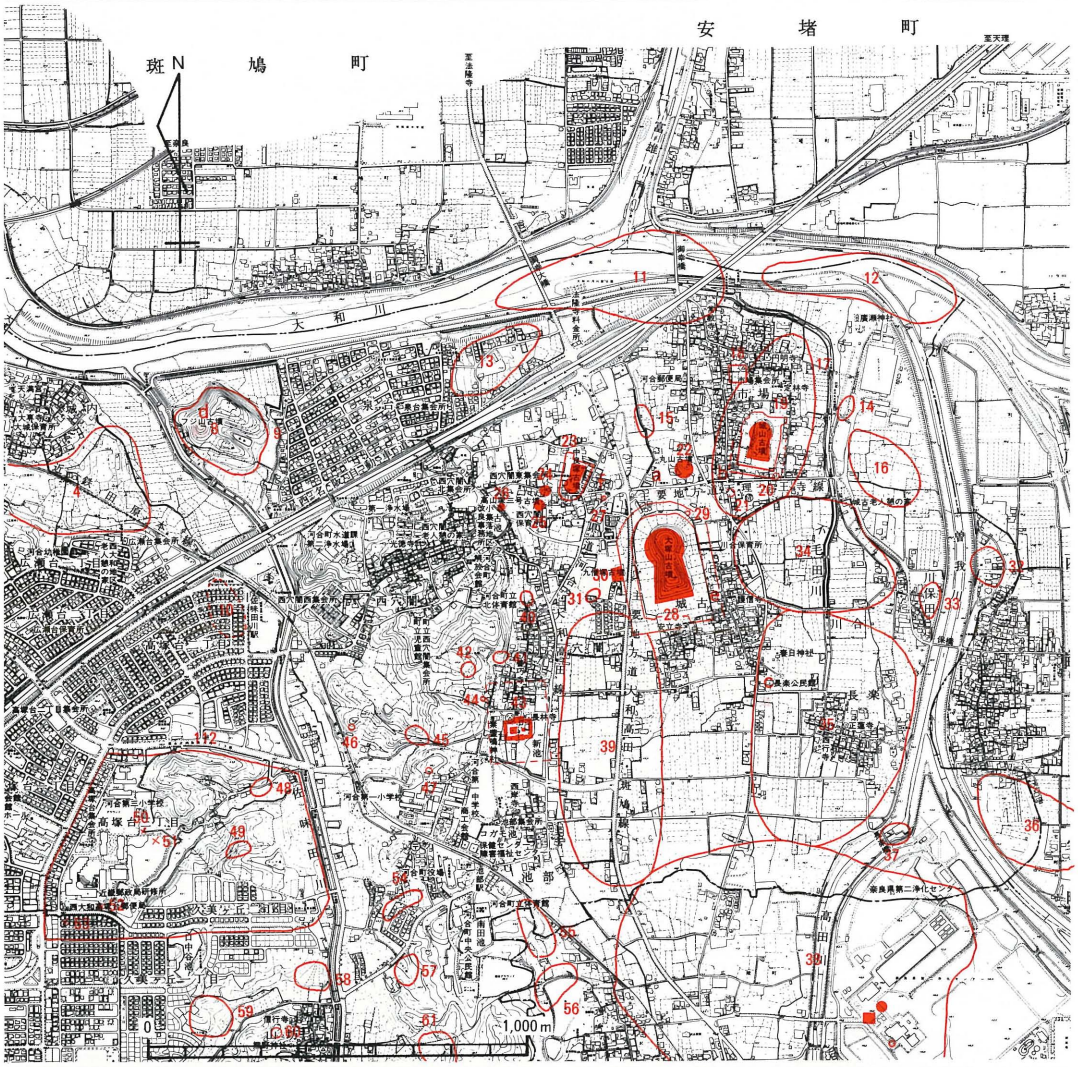
川合 930番地については、調査地が川合大塚山古墳の北側にあたり、外堤と推定されている部分の北側隣接地である。このため、河合町長より埋蔵文化財発掘通知が提出されていたが、外堤上ではなく周知の遺跡の範囲外であるため、立会調査で取り扱うこととなった。工事は、公共下水道市場汚水幹線築造工事に伴う迂回路設置のため、調査地について現地表面から約50㎝のすき取りを行った。この工事でのすき取りの及んだ地層は、暗褐色土であり畑の耕作土である。遺物は全くなく、遺構も確認できなかった。

川合 524番地については、河合町遺跡地図番号17・21にあたる。公共下水道市場汚水幹線築造工事に伴い河合町長より埋蔵文化財発掘通知が提出されたが、地図番号21については工法の変更により工事は実施されないこととなり、調査は行わなかった。地図番号17の遺物散布地について到達縦坑掘削に伴い立ち会ったが、既に現道路の工事等により旧土層は残存していないことが判明した。

穴闇 210－1番地は、河合町遺跡地図番号27の古墳状隆起隣接地である。この古墳状隆起は過去に周辺道路の整備の際に骨や土器類が出土したと伝えられ、祠が建てられている。聞き取り調査で得た内容から判断して中近世の墓地であったと思われるが、現在も埴輪や須恵器の微細な破片が散布しており古墳状隆起として扱っている。調査地はこの古墳状隆起の西側隣接地であり、個人住宅建設に伴い立会調査を実施した。現地表は、周辺地形からみると１ｍ程度盛土を行っており、遺構は確認できなかった。地権者の話では、調査地はもと水田であったということであり、隣接の古墳状隆起との間は段差があったようである。工事は、この盛土の範囲内におさまり、古墳状隆起に伴う遺構が存在するとしても、遺構面には全く影響を与えないと判断できる。

## 1992年度埋蔵文化財調査一覧

| | 遺　跡　名 | 調　査　地 | 調　査　原　因 | 調　査　期　間 | 調査区分 | 事業面積 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| a | 川合大塚山古墳隣接地 | 河合町川合930 | 公共下水道管埋設に伴う迂回路設置 | 1992.10.20 | 立会調査 | 464㎡ | 河合町 |
| b | 町遺跡地図No.21・No.17 | 河合町川合524 他 | 公共下水道管埋設に伴う迂回路設置 | 1992.10.25 | 立会調査 | 186㎡ | 河合町 |
| c | 長楽遺跡 | 河合町長楽20 | 専用住宅建設 | 1992.10.26～10.29 | 発掘調査 | 513㎡ | 国庫補助事業本書 |
| d | フジ山古墳 | 河合町泉台2074、1322－1、2079、2131 | 範囲確認調査 | 1992.11.25～1993. 3.22 | 測量調査 | 約 3,000㎡ | 国庫補助事業本書 |
| e | 川合大塚山古墳 | 河合町川合1150、1151 | 専用住宅建設 | 1992.11.27～12. 9 | 発掘調査 | 328㎡ | 国庫補助事業本書 |
| f | 町遺跡地図No.27隣接地 | 河合町穴闇210－1 | 専用住宅建設 | 1993. 3.26 | 立会調査 | 171㎡ | |




4.城内遺跡　8.フジ山古墳　9.フジ山遺跡　10.散布地（消滅）　11.散布地　12.散布地　13.散布地　14.散布地　15.散布地　16.散布地　17.散布地　18.市場垣内遺跡　19.城山古墳　20.古墳伝承地　21.古墳伝承地　22.丸山古墳　23.中良塚古墳　24.高山2号墳　25.高山3号墳　26.高山4号墳　27.古墳伝承地　28.川合大塚山古墳　29.古墳伝承地　30.九僧塚古墳　31.散布地　32.散布地　33.散布地　34.宮堂遺跡　35.長楽遺跡　36.散布地　37.散布地　38.箸尾遺跡　39.散布地　40.散布地　41.散布地　42.散布地　43.長林寺　44.長林寺瓦窯跡　45.散布地　46.古墳状隆起　47.古墳状隆起　48.散布地　49.散布地　50.化石出土地　51.化石出土地　52.化石出土地　53.化石出土地　54.散布地　55.北池遺跡　56.新池遺跡　57.散布地　58.散布地　59.散布地　60.古墳状隆起　61.散布地　112.化石の多産すると推定される範囲

（番号は河合町遺跡地図番号、112は今回新たに設けた）

**図1　発掘・測量調査地位置及び周辺の遺跡分布図**

# 長楽遺跡発掘調査報告

## はじめに

調査地は長楽遺跡の中央西端の部分にあたる。 長楽遺跡は奈良・平安時代の東大寺の荘園である小東庄との関連が指摘されている遺跡であるが、これまで発掘調査は実施されておらず、遺跡の具体相は不明であった。

今回の調査は、個人住宅建設の事前調査として発掘調査を実施した。工事は基本的に敷地全体に盛土を施し、擁壁部分のみ掘削を伴うこととなっており、遺構に直接影響を与える部分が小さいので、最小限の発掘を実施し、土層の状況を把握することに努めた。調査の方法としては、調査地に幅２ｍ×長３ｍのトレンチを２本設定し、北側を北トレンチ、南側を南トレンチとした。耕作土をバックホーで除去し、それより下層は人力により掘削を行った。

現地調査は1992年10月26日から10月29日までの実働４日である。

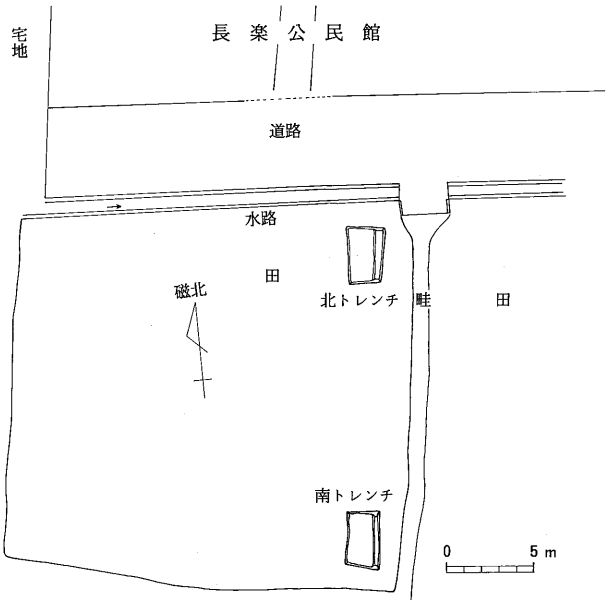



**図２　長楽遺跡調査地平面図**

## 調査結果

### １．層位

基本層序は1.耕作土、2.暗灰褐色砂質土、3.暗灰色粘土、4.灰白色砂、5.暗灰色粘土、6.暗青灰色砂、7.緑色砂である。このうち１・２・３層は南北両トレンチで観察され、４・５層は北トレンチでのみ見られ、６・７層は南トレンチでのみ見られた。２層は調査地の南１kmにある箸尾遺跡のⅢ層に対応し、また、３層は箸尾遺跡のⅣ層、６層は箸尾遺跡のⅥ層にそれぞれ対応すると思われる。４層と６層は洪水層と思われる。北トレンチでのみ見られる５層は植物遺体を多く含み、沼地であったかのような状況を想起させる。この層は南トレンチで見られないことから、

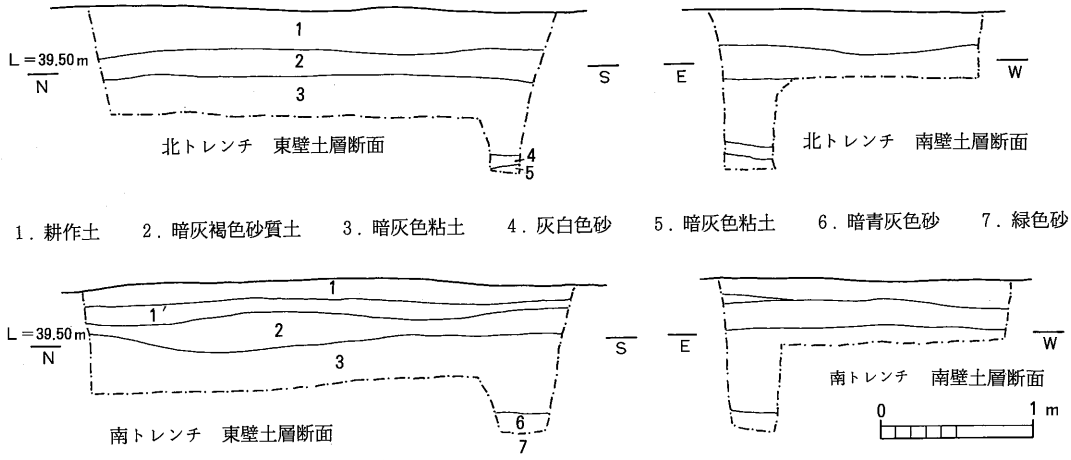
**写真１　長楽遺跡と箸尾遺跡＜左奥＞（北から）**

南側には広がっていないようである。

尚、住宅建設に伴う擁壁部分の掘削は現地表から約50cmで、2層内におさまるため、各トレンチでは3層の上面で精査を行ったが、遺構は全く確認できなかった。よって、この面で調査を終了し、断ち割り溝によって下位の土層を確認するにとどめた。

## 2．遺構

調査の方法および日数に制約があり、顕著な遺構は検出できなかった。




1．耕作土　2．暗灰褐色砂質土　3．暗灰色粘土　4．灰白色砂　5．暗灰色粘土　6．暗青灰色砂　7．緑色砂

**図3　長楽遺跡トレンチ土層図**

## 3．遺物

主な出土遺物は次のとおりである。

**石帯―丸鞆―（図4）**

縦、表面約2.3cm・裏面約2.4cm、横約3.8cm、厚さ0.65cmで、上下の側面は傾斜をもち、したがって、裏面の縦幅が大きくなっている。表面の表層は大部分が原状を留めているが、裏面や側面は磨耗が著しく、かつ裏面は約¼を欠いている。両面共に縁辺は小さく面取りをしているようであるが、磨耗のため判然としない。裏面には2カ所に潜り穴が同じ方向にあけられている。欠損している方の潜り穴を観察すると上方より下方の穴が深く、上方を先に穿っているようである。石材については奥田尚氏より次のとおり御教示いただいた。“片理が顕著な白色透明の石である。繊維状の細い筋が平行にならび、白色透明部の中に無色透明レンズ状をなす石英質部がかみあっている。このことから石英片岩である。紀伊の白石に相当するものであろう。”

**埴輪、瓦器、瓦質土器、陶磁器、瓦、土師器（図5）**

いずれも砕片である。そのなかで、図示できるものを掲載した。

図5―1は瓦器碗の底部の破片であり、高台が残る。内面には暗文が認められる。図5―2は甕の口縁部である。胎土は非常に細かく、焼成は軟質である。この他、図示しなかったが埴輪が1点ある。土師質であり、胎土は川合大塚山古墳群の埴輪に近似している。外面調整はヨコハケがのこ

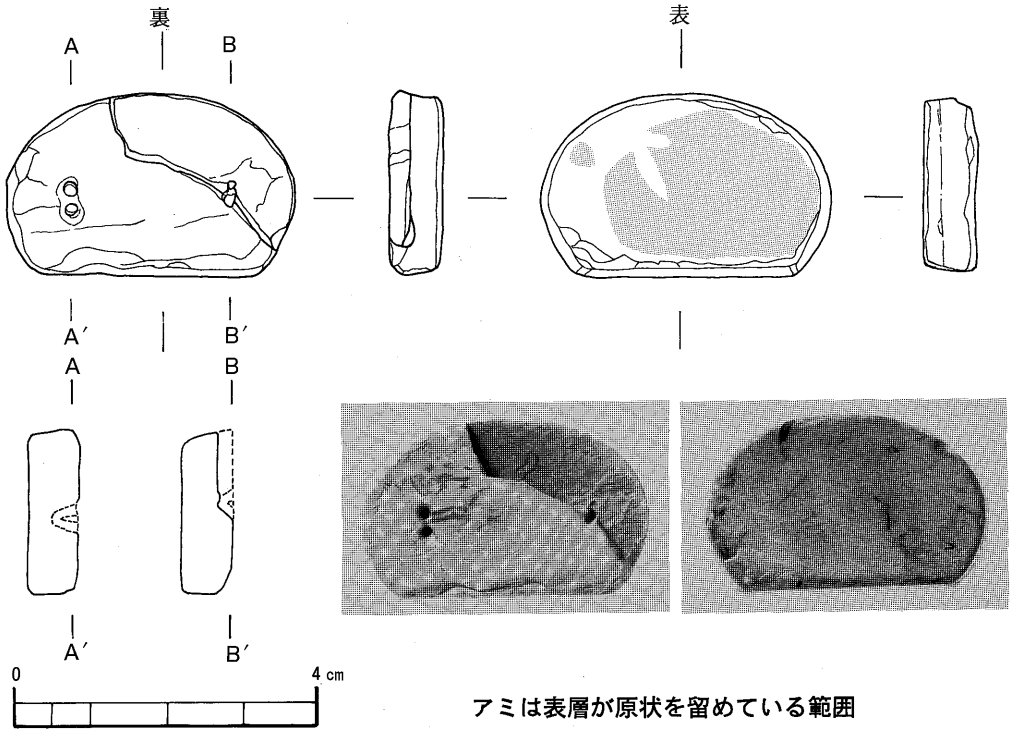



図4　北トレンチ出土　石帯

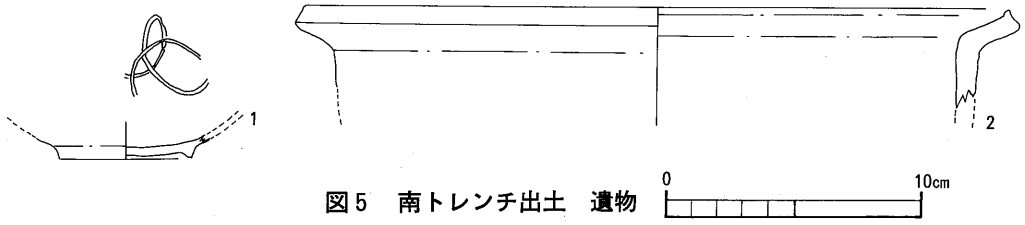



図5　南トレンチ出土　遺物

り、内面調整はナデである。小さな破片であるため、詳細は不明である。また、瓦質の擂鉢がある。詳細は観察できないが、市場垣内遺跡や城山古墳で出土しているものとほぼ同じである。

## まとめ

今次の調査により、長楽遺跡における基本層序の一部分を確認することができ、箸尾遺跡との層位的な対応を僅かではあるが知ることができた。しかし、両者の間には1.5m程の標高差があり、肉眼観察だけでは層位の繋がりは断定できない。

また、調査面積が狭小であったが、遺物の出土があり、それぞれの遺物の時期の遺構の存在を窺わせる。特に石帯が出土したことは、水田遺構だけでなく、建物等の遺構が存在することを推測させる。この石帯は北トレンチの2層内からの出土であり、後世の紛れ込みかと思われる。調査地周辺の地形は、調査地の北側が約1m以上高くなっており、そちらに荘館などの建物遺構が存在すると考えられる。

# フジ山古墳測量調査報告

## はじめに

フジ山古墳は『奈良県遺跡地図』[1]では10－Ｂ－15として掲載されているが、直径約20ｍの円墳とされてきた。いっぽう、地元では前方後円墳ではないかとも言われてきた。このため、筆者が1988年５月２日に踏査した際には、円墳であると確信したが、マウンド状の地形が２ヶ所認められたので、２基の円墳もしくは前方後円墳の両方の可能性を残して報告している。[2]その後、1989年度に町内遺跡詳細分布調査を実施した機会に簡単な計測を行い、直径約40ｍの円墳であることが明らかとなった。[3]

この結果、従来考えられていたよりも非常に大型の円墳であり、かつ、大和川に臨む独立丘陵上に占地することから、その存在意義が注目されることとなった。

今回の調査はこのような経過を踏まえ、今後の保存に向けての基礎資料を整えるために、墳丘の範囲確認調査として測量調査を実施した。

## 位置と環境

フジ山古墳は奈良盆地の西縁に横たわる馬見丘陵北端に位置するフジ山の丘陵頂部に所在する。このフジ山の北側には大和川、西側には佐味田川が流れ、南東に小さな解析谷があり、馬見丘陵本体とは切り離された独立丘陵状を呈する。ただし、東側は宅地造成時に切土されており、元の地形ではない。また、現在では山麓と大和川の間、西側の城内遺跡と佐味田川の間には水田が営まれているが、時期は特定できないものの、佐味田川が大和川に合流する地点での川幅は現在より広かったと思われる。

さて、フジ山には丘陵頂部が南西・北東の２ヶ所あり、フジ山古墳はそのうちの南西側の頂部に占地する。一方のフジ山の北東側の頂部ではナイフ形石器が採集され、[2]また、南東へ伸びる尾根筋斜面でも剥片を採集しておりフジ山全体に旧石器時代の遺構の存在が予想されている。

周辺の古墳の分布状況をみると、東南東約1.1㎞にある川合大塚山古墳（河合町川合）を中心として、古墳時代中期後半から後期前半にかけての古墳群がある。フジ山古墳と同規模の円墳としては丸山古墳があり、直径約48ｍを測る。さらにその東方約3.3㎞には古墳時代前期末～中期初頭に築造されたと考えられる大型前方後円墳の島の山古墳（磯城郡川西町）があり、周辺にそれ以後の築造と見られる小古墳が群がり、一つの群を形成している。

南方については、フジ山の南側に続く馬見丘陵の稜線上及び東斜面を中心として、古墳時代前期から中期の大型古墳が分布しており、「馬見古墳群」と呼ばれる。しかし、フジ山古墳と通常「馬見古墳群中央群」と称される古墳群の北端の池上古墳の間約2.5㎞には、顕著な古墳の分布はみら

れない。

西方は大和川に南方から合流する葛下川流域や北方から合流する竜田川流域の平地を除けば、山地形であり、竜田川流域の平群地域の古墳以外には大型古墳の分布はみられない。さらに、大和川を下り大阪府に入ると、柏原市の松岳山古墳や玉手山古墳群という前期の大型古墳が大和川に沿って分布している。また、大和川北岸には中期末の高井田山古墳が位置する。この古墳は畿内での古い形態の横穴式石室を有し、熨斗をはじめとする豊富な遺物の出土で知られる。

北側には大和川を挟んで斑鳩地域があり、前期古墳としては直径約33m・高さ4mの斑鳩大塚古墳が平地に位置する。中期には斑鳩大塚古墳の北東2㎞の丘陵尾根上に瓦塚1号墳（全長97m）・瓦塚2号墳（全長95m）という2基の前方後円墳が相次いで築造される。また、瓦塚2号墳の南側に接して直径約40mの円墳（瓦塚3号墳）が位置している。後期には多くの小規模な古墳が丘陵地に分布するが、大型の古墳としては、直径48m・高さ9mの藤ノ木古墳が法隆寺の西側約350mの地点に単独で築造される。藤ノ木古墳は豊富な副葬品をもち、横穴式石室や家形石棺の規模などから同時期の有数な古墳で、6世紀の斑鳩地域を考える上で重要な意味をもつ古墳である。

**写真2　フジ山と川合大塚山古墳群・島の山古墳（西上空から）**

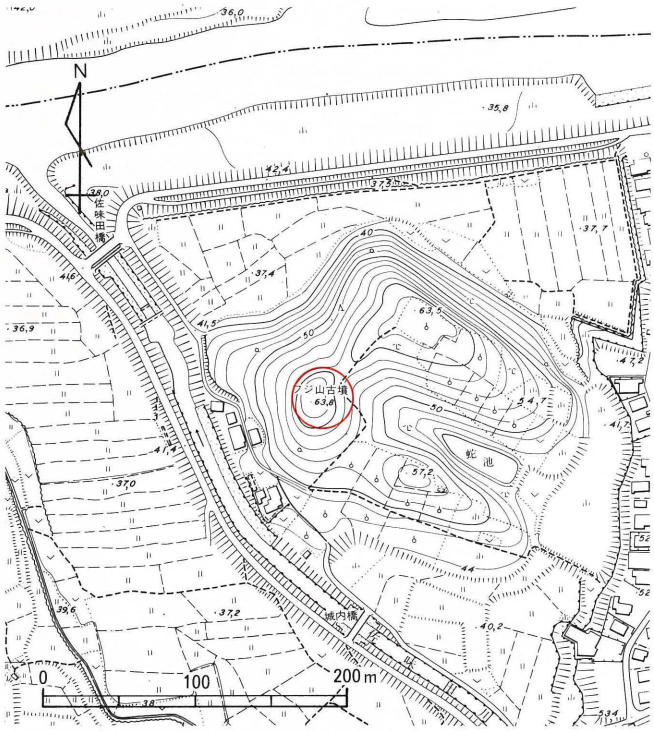



**図6　フジ山古墳位置図**

## 測量の方法

調査前のフジ山古墳の状況は、墳丘だけでなく、周辺も広範囲にわたって竹林となっており、かつ、竹林が途切れる空閑地にも笹や雑木が生い茂り、平板測量を行うには極めて見通しの悪い状態であった。幸い、地権者の御好意により、笹や雑木は伐採することができたが、竹は伐らないということで調査に入ったため、測量は困難を極めた。

このような状態であったので、測量の方法としては閉鎖トラバースを採用した。当初基準点は任意に設定し、セオドライトを用いてスチールテープで斜距離を計測し、手計算により水平距離を算出してP01を（0, 0）とする任意の座標を組んだ。基準点杭は、測量調査終了後除去する必要があったため、4.5cm角長さ40cmの木製杭を用いた。基

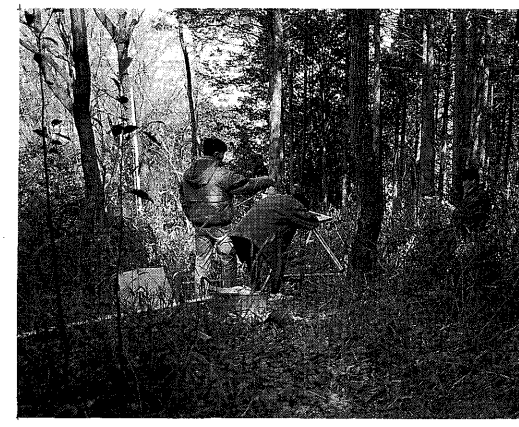


写真３　測量調査風景

| | X | Y | H |
|---|---|---|---|
| No.1 | −156858.968 | −24546.522 | 57.981 |
| No.2 | −156848.996 | −24527.165 | 58.590 |
| P.01 | −156832.999 | −24540.559 | 63.601 |
| P.02 | −156843.238 | −24536.056 | |
| P.03 | −156841.746 | −24527.534 | 59.479 |
| P.04 | −156851.656 | −24535.723 | 59.003 |
| P.05 | −156855.626 | −24545.422 | 58.740 |
| P.06 | −156845.817 | −24544.596 | 61.192 |
| P.07 | −156848.554 | −24555.792 | |
| P.08 | −156841.833 | −24553.340 | 60.850 |
| P.09 | −156833.530 | −24549.112 | |
| P.10 | −156827.538 | −24551.088 | |
| P.11 | −156827.303 | −24556.047 | 62.628 |
| P.12 | −156821.757 | −24554.786 | 62.622 |
| P.13 | −156821.508 | −24549.579 | 63.654 |
| P.14 | −156815.924 | −24551.682 | 62.416 |
| P.15 | −156815.547 | −24546.905 | 62.976 |
| P.16 | −156820.267 | −24541.329 | |
| P.17 | −156812.492 | −24540.104 | 61.574 |
| P.18 | −156811.255 | −24532.337 | 60.555 |
| P.19 | −156823.290 | −24517.283 | 59.583 |
| P.20 | −156835.123 | −24520.980 | |
| P.21 | −156834.620 | −24530.441 | 62.592 |
| P.22 | −156831.532 | −24534.666 | |
| P.23 | −156825.927 | −24537.751 | |
| P.14−1 | −156808.123 | −24554.280 | |
| P.18−1 | −156803.053 | −24532.757 | |
| P.18−2 | −156801.170 | −24520.882 | |
| P.19−1 | −156812.163 | −24513.530 | |

フジ山古墳測量トラバース成果表（単位：m）

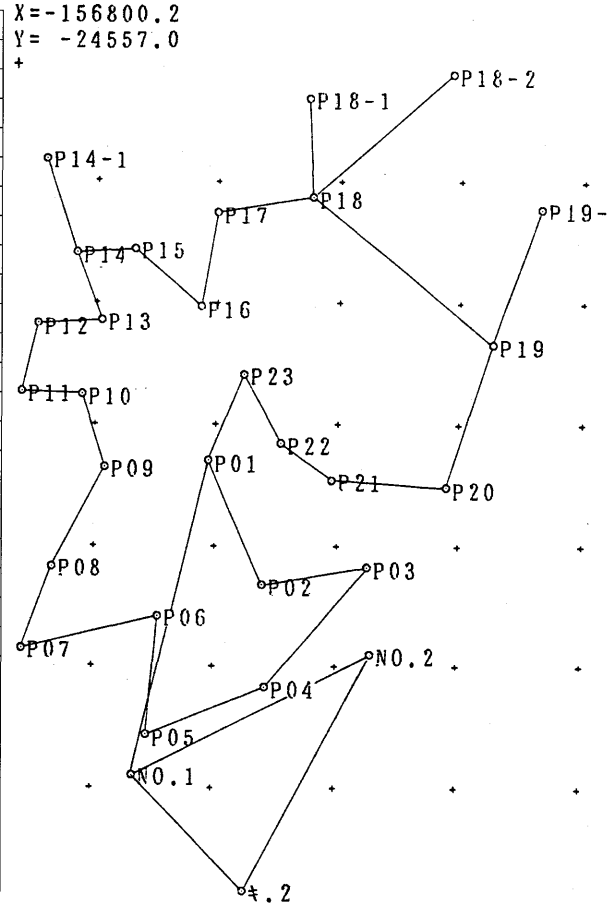



図７　基準杭概念図

準点は23点を設けたが、内角の総和の誤差は理論上の総和3780° 00′ 00″ に対して3780° 00′ 45″ という45″ の誤差におさまった。縮尺が１／100であるため、この誤差は充分な精度であると認められる。その後、今後の為に国土座標から３級基準点をワールド航測コンサルタント株式会社に業務委託して２点設置し、先の任意の座標を国土座標第Ⅵ系に実数値で変換した。また、調査の進行に応じて、測量範囲を広げたために、開放トラバースにて補助点を設置した。これらのトラバースの成果は表のとおりである。

作図の方法としては、縮尺を１／100とし、最高所の高さを０ｍとして、そこからのマイナス値で25㎝間隔の等高線とした。高さの基準０ｍポイントの標高は63.782ｍである。よって、－0.25ｍは標高63.532ｍというように、以下読み換えればよい。

なお、測量に使用した主要な機材は下記のとおりである。

セオドライト＝Ｎｉｋｏｎ　ＮＴ－２ＣＤ、レベル＝測機舎　自動レベルＢ－２

## 調査結果

### １．墳丘

墳丘裾は北側では－3.75ｍと－4.00ｍの間に傾斜変換線があり、－4.00ｍから－5.00ｍの間は傾斜が緩やかなテラス状になっている。この北側部分で墳丘の遺存状況が非常に良好であり、墳丘裾も観察しやすい。東側から南側にかけては－4.25～－4.50ｍ付近になる。南側は若干張り出したような形になるが、盗掘時に掻き出された土が溜まって現在の地形になったようである。北側に較べて平均で50㎝ほど墳丘裾が低くなっているが、東側から南側にかけては竹林となっており若干整地されているようである。これに対して西側は明瞭ではなく、ほぼ一定の傾斜であるが、－4.50ｍの前後でやや等高線の間隔が広くなる。この部分を墳丘裾と考えておきたい。そして、等高線の全体の流れからは、墳形は円形と考えるのが妥当である。

フジ山古墳の特徴のひとつとして、先述の北東側の丘陵頂部に続く尾根を区画していることがあげられよう。この墳丘を区画するために設けられた掘割は、－1.50ｍの等高線部分で幅15ｍを測る。この掘割部分では墳丘側がかなり削られており、損壊が著しいものの全体の雰囲気としては、掘割の状況を留めている。また、掘割の南側は竹林のために地形の改変が著しく、掘割を挟んだ墳丘の反対側は現状では小円墳のような地形を呈しているが、現地での観察では、これが古墳である可能性は極めて少ない。

**写真４　墳丘<左>と掘割（南から）**

以上のような観察から墳丘の規模を復原すると、本来の墳丘が正円形であるという確証はないが、便宜上、正円形として復原すれば直径約40m弱とするのが妥当であろう。また、高さについては墳丘の遺存状態の良好な北側での約４ｍと捉えておきたい。

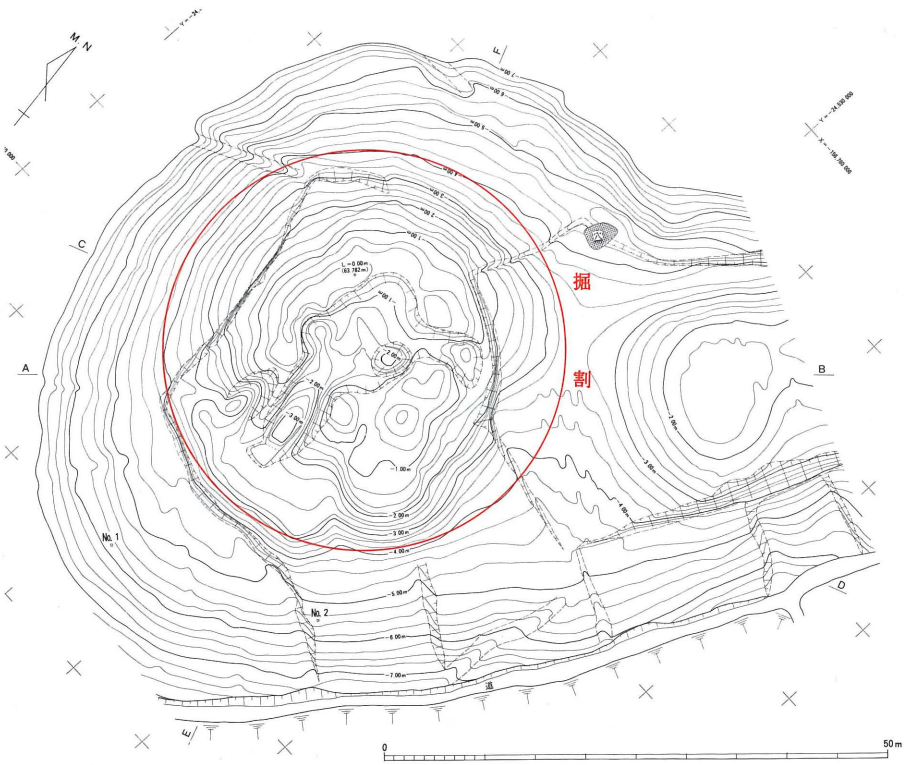



図８　フジ山古墳墳丘復原想定図

つぎに、墳頂部の状況について記す。墳頂部には非常に大きな盗掘壙があるが、この地域では“法隆寺の南に、法隆寺が災難に逢った時にこれを掘り出せば再興できるに足る純金の瓦が３枚埋められている”という、いわば「金の瓦」伝説がある。地権者の話によると、地権者の２代前には既に現状のような穴があったようで、盗掘は明治年間かそれ以前であろう。また、盗掘壙の状態から、盗掘は一度ではなく、複数回にわたっているようである。盗掘壙は墳丘の中心に一辺約10mの不整方形の大きなもので、深さは約１ｍである。そして、ところどころにさらに50cmほど掘り下げた穴がある。さらに、方形の穴から南へ幅５ｍ・長10ｍの細長い穴が伸びている。この墳丘の中心部の盗掘壙のほか、周辺に２ヶ所の盗掘壙が認められる。墳頂部平坦面は盗掘により著しく破壊されているようである。－0.25mの等高線が閉じる部分の中間を平坦面の肩とすれば、墳頂部平坦面の直径は約15mとなる。墳頂部の損壊が著しいので復原的考察には限界があるが、このようにみていくと非常に墳頂部平坦面の大きな古墳と考えられる。

写直５　墳頂部盗掘壙（北から）

**写真６　墳丘（北東から）**

段築については、現地での観察と測量図から判断する限りにおいては無いものと考えてよいであろう。

**２．葺石**

今回の測量調査を実施するまでの観察では、葺石などの存在は全く不明であった。この測量調査を実施するにあたり、地権者への聞き取り調査によって初めて石材の存在が明らかとなった。そして、現地調査に入った際に草刈りを行ったところ、石材の露出が認められた。この石材の露出は主に墳丘の西半部に見られる。特に先述の南北にあけられた細長い穴の西側と墳丘の南西側から北に伸びる小さな崖の上端に多く見られる。

この石材の大きさについては、小さいもので直径５㎝程度の礫であり、大きなものは長30㎝程度の板石である。石材の種類は輝石安山岩・黒雲母安山岩・花崗岩・チャートである。これらの特徴から考えると竪穴式石室などの石室材とするよりは、周辺の古墳での状況とも合わせて葺石と考えた方がよい。これらの石材の採取地としてはフジ山古墳から大和川を６㎞程下った亀ノ瀬峡谷や二上山が考えられる。

**写真７　葺石露出状況**

## まとめ

調査の成果から得られたフジ山古墳についての概要を再度記しておく。

（立地）丘陵頂部。

（墳形）円形。

（規模）直径約40m。高さ約4.0m。墳頂部平坦面の直径約15m。

（その他）掘割。葺石。段築なし。

（築造時期）不明。

今回の調査にあっては、築造の年代を特定する遺物は確認できなかったが、独立丘陵頂部に占地することや墳丘規模に対して墳高が低く墳頂部平坦面が広いことから、横穴式石室を埋葬施設とする後期古墳ではなく、竪穴系の埋葬施設を持つ古墳、しかも墳丘が大型の円墳であることから中期若しくは前期古墳と考えられないだろうか。葺石の石材からみても、他の馬見丘陵とその周辺の古墳での知見に照らして、中期後半よりは遡上ると考えたい。しかし、服部伊久男氏が指摘されている[(4)]ように、大型円墳の墳丘形態の時期的変遷についてはおおまかな流れはあるものの、墳丘形態からだけでは築造時期を決定づけることはできないので、上記のような可能性を秘めつつ、築造年代は不明としておく。

さて、大型円墳としてのフジ山古墳の存在意義について若干の考察を行いたい。大和における大型円墳については石部正志氏[(5)]、佐々木好直氏[(6)]の成果があり、近年では服部氏が時期別にデータをまとめ、文献の集成も行っている[(7)]。ここでは具体的な資料は服部氏の成果によることとし、個別の数値等の一覧表は割愛する。

大和の大型円墳の中でも特に卓越した規模の古墳は4世紀後半の富雄丸山古墳（直径86m・奈良市）、5世紀前半の近内鑵子塚古墳（直径80m・五条市）・コンピラ山古墳（直径95m・大和高田市）がある。前期及び中期の大型円墳の意義と後期・終末期のものとは当然同列には扱えないであろう。つまり、後期・終末期の大型円墳の場合は前方後円墳が造られなくなる時代の大規模な古墳であり、また、横穴式石室の規模も問題となってくるので、卓越した規模の円墳という場合には牧野古墳（直径60m・広陵町）や藤ノ木古墳（直径48m・斑鳩町）なども含めて考えなければならない。

前期・中期の大型円墳は大型前方後円墳に付随するものと、単独で築造されたものの類型がある。その中で、特に墳丘規模の大きな富雄丸山古墳・近内鑵子塚古墳は単独で存在するもので、盆地の南北の端に位置し、その存在意義が問われてきたが、近年の調査で大和で最大の規模であることが明らかになったコンピラ山古墳が築山古墳に付随するような存在形態を示すことから、特に大きな墳丘をもつ円墳の理解について再考を迫られることとなった。ただし、コンピラ山古墳は帆立貝形古墳である可能性もあり、特に馬見古墳群では大型の帆立貝形古墳の存在が多く、巣山古墳に対する乙女山古墳のありかたに共通する意義も考えられる。いずれにしてもこれらの古墳が交通の要衝

にあることは共通の存在形態として捉えられよう。

交通ということで考えれば、大和と周辺を結ぶ主要な交通路としては、横大路や紀路という陸路だけでなく、水運が大きな要素を占めていたと思われる。この水運を考えた時にフジ山古墳の位置は重要な地点になってくるのである。フジ山古墳が臨む大和川は奈良盆地の水系が全て合流する川であり、大和と河内を結ぶ主要な水上交通路であったと考えられる。古墳時代の大和川は現在の柏原市で大きく向きを変えて北流し、河内湖へと注いでいたのであるが、この大和川に沿って古墳の分布を見ていくと、大和川が大きく向きを変える石川との合流点には石川の西岸に沿って中期の古市古墳群（羽曳野市・藤井寺市）がある。そして、大和川が大きく向きを変える地点には前期の玉手山古墳群（柏原市）や松岳山古墳（柏原市）、また、中期末の横穴式石室を持つ高井田山古墳（柏原市）がある。そして、大和に入ってすぐの地点にフジ山古墳が位置し、さらに上流には多くの河川の合流点に中期から後期の川合大塚山古墳群（河合町）や前期の島の山古墳（川西町）が位置している。これらの大和川に沿う古墳はフジ山古墳を除けば、築造された年代では有数の古墳である。また、時期の不明なものでは大和川の支流の佐保川に沿って造られた松山古墳（大和郡山市）が直径52mの大型円墳であり、額田部地域での有数の古墳である。

以上述べてきた古墳に較べるとフジ山古墳の規模はやや小規模である。しかし、冒頭に地元で前方後円墳ではないかとされてきたことを報告したが、地元ではフジ山全体を古墳であると認識している人が多い。実際、大和川と佐味田川の合流点付近からフジ山全体を見ると、東西に主軸をもつ前方後円墳のように見えるのである。ただし、これは現地形での見かけであるので古墳築造当時にどのように地形を意識していたかは確定できないが、単純に墳丘規模の問題だけでなく、立地を考えればフジ山古墳はこれまで述べてきた大型円墳に比して見劣りのしない古墳と言えよう。

フジ山古墳の評価については、今後、大和川との関わりや自然地形を含めての検討が必要である。今回の調査で基本的な資料としての測量図がようやく整い、これまで大和の大型円墳を考える中で検討の場にすら出てこなかったが、やっと日の目を見ることができたという思いである。しかし、詳細な検討をするにはまだまだ資料としては充分ではなく、遺物の追跡調査など今後に残された課題は多い。

注

（1）奈良県立橿原考古学研究所編集・奈良県教育委員会発行『奈良県遺跡地図　第2分冊改訂』昭和59年3月1日
（2）吉村公男・深瀬早人・佐藤良二「馬見丘陵におけるナイフ形石器の一例」（『旧石器考古学』39）1989年10月
（3）河合町教育委員会『河合町文化財調査報告第4集　河合町遺跡詳細分布調査報告』1990年3月31日
（4）大和郡山市教育委員会『大和郡山市文化財調査概要21　松山古墳Ⅰ　第1・2次発掘調査概要報告書』1991年3月31日
（5）石部正志「大和の大形円墳」（『末永先生米壽記念獻呈論文集』乾）1985年
（6）佐々木好直「奈良県の円墳」（『古代学研究』第123号）1990年
（7）注（4）文献

# 川合大塚山古墳発掘調査報告

## はじめに

川合大塚山古墳は、1956（昭和31）年に国史跡指定のための実測調査が実施され、1959（昭和34）年刊行の『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報　第十二輯』にその成果が掲載されているが、その後、墳丘及び周濠部分での考古学的な調査は実施されていない。国史跡指定地外では、1979（昭和54）年に北側隣接地の発掘調査が実施され、また、西側・北側で道路工事に伴い立会調査が実施されてきたが、明確な遺構は確認されていない。南東側では1991（平成３）年に下水道工事に伴う立会調査を実施したのに次いで、今回の調査が２例目である。この２回の調査により、埋め立ての状況が明らかになってきた。

今回発掘調査した河合町大字川合字城古垣内1150・1151番地は、川合大塚山古墳の周濠外で外堤の範囲にあたるとされてきた部分である。個人住宅の建て替えに伴い発掘調査を実施した。調査は敷地の南端と北端に東西方向のトレンチを２本設定し、北側を北トレンチ、南側を南トレンチとした。調査面積は約29㎡である。

掘削の方法としては、当初外堤上の埴輪列の存在が予想されたため、全て人力によった。

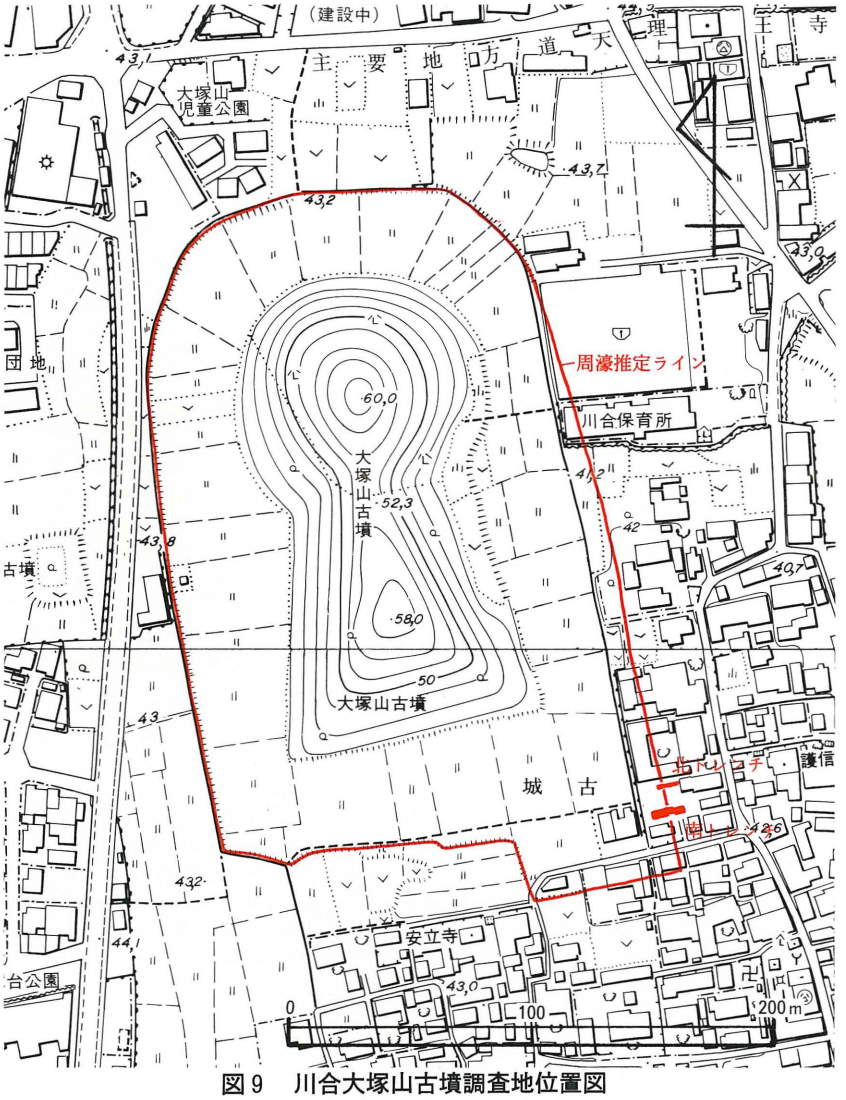



図９　川合大塚山古墳調査地位置図

調査の進行にともない、トレンチの西から6mまでは埋め立てによる土と判明したが、地盤が軟弱なため、崩壊の危険もあり、また、建物への影響も考慮し、最少限の掘削にとどめた。なお、現地調査は1992年11月27日から12月9日までの実働11日である。

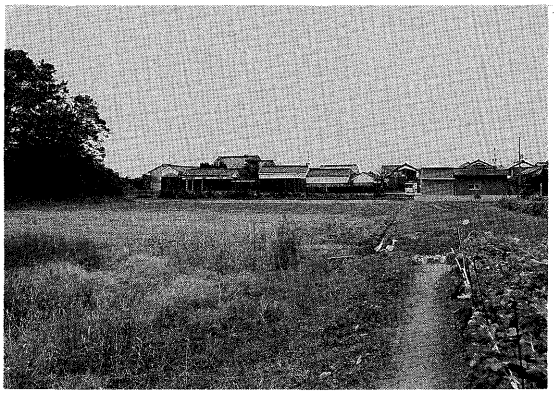


写真8　調査地<中央やや右>と
墳丘前方部端（西から）

## 調査結果

### 1．層位

南トレンチの土層は基本的には東から西に傾斜する中世以降の埋土であり、最上層は水平に堆積する近現代の整地のための盛土である。ただし、最下層に水平方向に堆積する22・23層及び17・18・21層は中世の埋め立て以前の土層である。23層は砂を含むきめ細かい粘土の層である。22層は粗い砂の層で、形象埴輪の破片が1点出土している。このような22・23層の状況から帯水していたと思われる。

各層に包含される遺物の内容から検討すると、1層は今回の建物の建て替えに伴い、先にあった住居を取り壊した際の整地層である。2層はコバルトの鮮やかな陶磁器があり、近代以降の盛土である。地元の人の話では、1920年代には現在の状況と同じであったとのことであり、それ以前の整地と考えられる。3層は18世紀代のくらわんか碗を多く包含しており、それ以降の埋め立てである。周辺の状況を考慮すると、この時期に当該土地の埋め立てはほぼ現状に近いものとなっていたようである。6・7・11層には層位の重なりに応じて、順次古い遺物が混じるという傾向である。14・15・16層には埴輪や瓦器、土師器が含まれる。8層は旧耕作土層で、その東側で盛り上がる15層は8層に対する畦と考えられる。8層の下層の25層は8層より一段階古い時期の耕作土と考えられる。8層と25層の間に桟瓦があり、8層の時

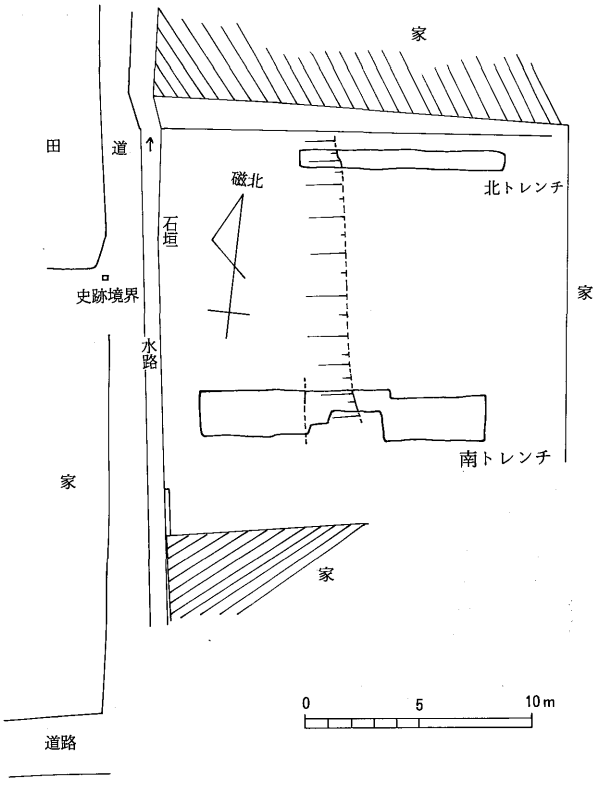



図10　川合大塚山古墳調査地平面図

期が近世以降と考えられる。これは上層の状況とも合致している。よって、25層の時期は近世以前となり、漠然とではあるが、中世には調査地は水田であったことになる。

トレンチ中央付近の９・10層は、地山直上の層で、砂と粘土が薄く互層になっており、しまりのよい層である。この状況から、外堤の盛土の可能性もあるが、調査面積が狭く、また、近現代の攪乱が著しいため、その広がりは観察できなかった。

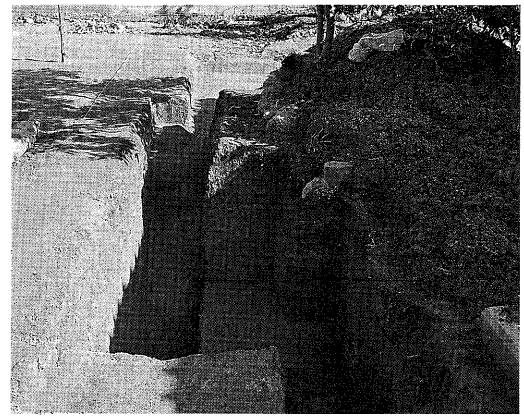


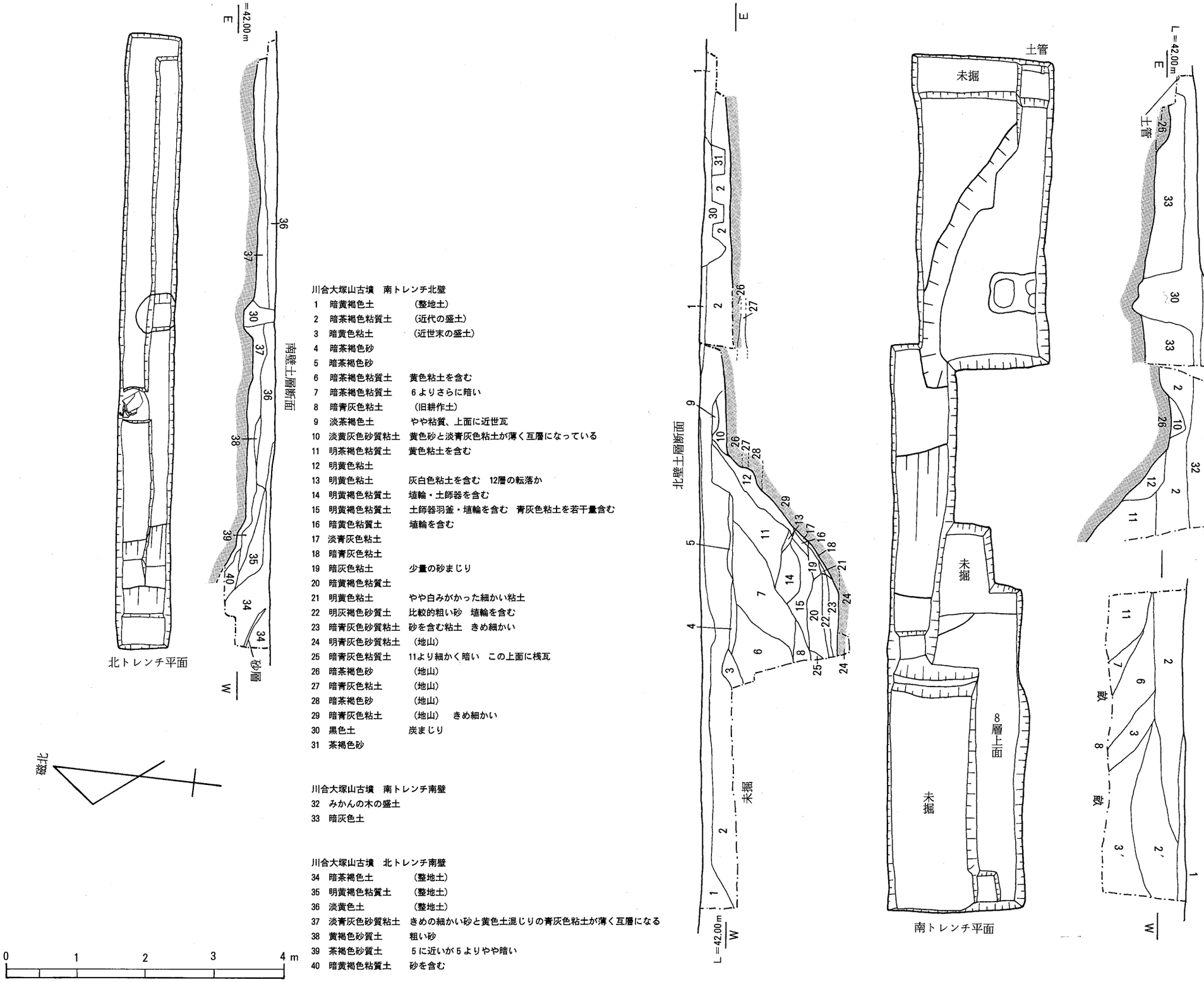
写真９　南トレンチ近景（西から）

北トレンチでの土層はほぼ南トレンチと同様の状況である。ただし、地山直上の37層は南トレンチの９・10層と質感は同じであるが、９・10層に較べるとしまりが悪く、砂が多い。

## ２．遺構

今回の調査に先立ち予想された外堤の埴輪列は確認できなかった。２本のトレンチで東から西に急傾斜で下がる落ちを検出した。この２ヶ所の落ちを結ぶラインを北に延長すると、調査地の北隣

写真10　川合大塚山古墳墳丘と調査地＜左下＞（東上空から）




川合大塚山古墳　南トレンチ北壁

| | | |
|---|---|---|
| 1 | 暗黄褐色土 | （整地土） |
| 2 | 暗茶褐色粘質土 | （近代の盛土） |
| 3 | 暗黄色粘土 | （近世末の盛土） |
| 4 | 暗茶褐色砂 | |
| 5 | 暗茶褐色砂 | |
| 6 | 暗茶褐色粘質土 | 黄色粘土を含む |
| 7 | 暗茶褐色粘質土 | 6よりさらに暗い |
| 8 | 暗青灰色粘土 | （旧耕作土） |
| 9 | 淡茶褐色土 | やや粘質、上面に近世瓦 |
| 10 | 淡黄灰色砂質粘土 | 黄色砂と淡青灰色粘土が薄く互層になっている |
| 11 | 明茶褐色粘質土 | 黄色粘土を含む |
| 12 | 明黄色粘土 | |
| 13 | 明黄色粘土 | 灰白色粘土を含む　12層の転落か |
| 14 | 明黄褐色粘質土 | 埴輪・土師器を含む |
| 15 | 明黄褐色粘質土 | 土師器羽釜・埴輪を含む　青灰色粘土を若干量含む |
| 16 | 暗黄色粘質土 | 埴輪を含む |
| 17 | 淡青灰色粘土 | |
| 18 | 暗青灰色粘土 | |
| 19 | 暗灰色粘土 | 少量の砂まじり |
| 20 | 暗黄褐色粘質土 | |
| 21 | 明黄色粘土 | やや白みがかった細かい粘土 |
| 22 | 明灰褐色砂質土 | 比較的粗い砂　埴輪を含む |
| 23 | 暗青灰色砂質粘土 | 砂を含む粘土　きめ細かい |
| 24 | 明青灰色砂質粘土 | （地山） |
| 25 | 暗青灰色粘質土 | 11より細かく暗い　この上面に桟瓦 |
| 26 | 暗茶褐色砂 | （地山） |
| 27 | 暗青灰色粘土 | （地山） |
| 28 | 暗茶褐色砂 | （地山） |
| 29 | 暗青灰色粘土 | （地山）　きめ細かい |
| 30 | 黒色土 | 炭まじり |
| 31 | 茶褐色砂 | |

川合大塚山古墳　南トレンチ南壁

| | | |
|---|---|---|
| 32 | みかんの木の盛土 | |
| 33 | 暗灰色土 | |

川合大塚山古墳　北トレンチ南壁

| | | |
|---|---|---|
| 34 | 暗茶褐色土 | （整地土） |
| 35 | 明黄褐色粘質土 | （整地土） |
| 36 | 淡黄色土 | （整地土） |
| 37 | 淡青灰色砂質粘土 | きめの細かい砂と黄色土混じりの青灰色粘土が薄く互層になる |
| 38 | 黄褐色砂質土 | 粗い砂 |
| 39 | 茶褐色砂質土 | 5に近いが5よりやや暗い |
| 40 | 暗黄褐色粘質土 | 砂を含む |

**図11　川合大塚山古墳トレンチ平面及び土層断面図**

の宅地のさらに北側では、このラインの延長線上で２枚の畑の間に約１ｍの段差がある。また、南トレンチでの落ちの高さは約1.6ｍをはかり、底のレベルは現水田面より約40㎝低い。

南トレンチの壁面で土層を観察すると、落ちの法面に沿って中世以降に数次にわたり東から西へと盛土を行い、現在の西側石垣部分まで埋め立てている。これに対応するように北隣の宅地の東西方向に築かれた石垣も、落ちの延長線上付近で積み方が異なり、継ぎ足しているようである。

南トレンチの東半部分では、深さ約50㎝の土壙を検出している。この土壙については遺物からみて、近世のものである。

北トレンチでは瓦を埋めこんだ小さな土壙を検出している。

写真11　南トレンチ（西上空から）

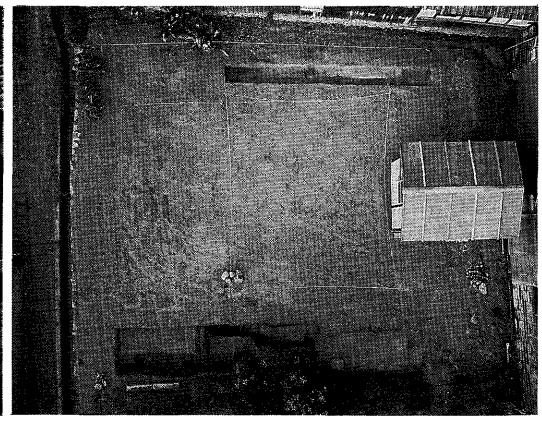


写真12　調査地航空写真

**３．遺物**

調査により出土した遺物はコンテナー６箱分であるが、うちわけは中世以降の盛土造成に伴うと思われる瓦・瓦質土器・陶磁器が５箱と埴輪及び須恵器が１箱である。いずれも細かい破片が大半である。

**埴輪（図12－１～12・図13－13～25）**

図12－１～８は法面の直上の層位（土層断面図の16・22層）から出土している。１・２・４・６は円筒埴輪（形象埴輪の基底部等の可能性もあるが、破片が小さいため器種は特定できない。以下の資料についても、そのような可能性を残しつつ、便宜上円筒埴輪としておく）の体部であろう。外面調整はヨコハケである。ハケの原体は、１は非常に細かく、４は粗い。５では原体は２種類使用されている。１・６では一次調整のタテハケが観察できる。また、２ではハケの停止痕が認められる。６には円形スカシが一部遺存している。１は須恵質で焼成は硬質である。５・７は円筒埴輪の底部であろう。５は土師質で軟質。外面調整は、表面が磨滅しているためはっきりしないが、ナナメのナデかハケによる調整であろう。内面はヨコハケ調整。７は須恵質で焼成は硬質である。外面調整は一次調整はタテハケ、二次調整はヨコハケである。内面及び底部はナデにより調整している。また、底面には植物の茎の痕跡が残っている。３は円筒埴輪の体部と思われるが、磨耗が著し

く調整等は不明である。8は形象埴輪である。種類は不明であるが、横断面形が隅丸方形であり、底面が観察されるので靱形埴輪もしくは家形埴輪の基底部と考えられる。断面を観察すると1枚の粘土板を曲げて内面に補強材として粘土を詰めている。このため縦断面形は外面がほぼ直であるのに対して、内面は内側にせりだしている。

図12－9～12、図13－13・14は中世以降の埋め立て土（土層断面図の3・6・7・11層）から出土している。すべて円筒埴輪と思われる。9・10・13・14は体部の破片である。いずれも外面調整はヨコハケであり、凸帯部分をナデ仕上げしている。内面はナデ調整である。このうち、14以外は表面の磨耗が著しい。また、9・10は明赤褐色を呈し、胎土もよく似ている。11は口縁部の破片である。内外面共にヨコハケによる調整を行ったあと、口縁端部から約2㎝まではヨコナデによる調整で仕上げている。12は底部の破片である。調整は磨耗のため不明。粘土帯の接合部分で剥離している。

図13－15～24は土層断面図の2層から出土したものである。すべて円筒埴輪と思われる。15が口縁部であるほかはすべて体部の破片である。15は内外面共にナデ調整。上部がやや外反し口縁部と考えられる。16～24のうち、19・20・22・23は器表面の磨耗が著しく、19・23の外面がヨコハケ調整であること以外は観察が困難である。これらは焼成も軟質である。また、22は凸帯が剥離しているが、凸帯取付け部分に沈線がみられる。16は外面ヨコハケ、内面タテハケ調整。焼成は軟質。17も外面ヨコハケ、内面タテハケ調整である。焼成は硬質で須恵質に近い。凸帯は他の資料に較べて幅が広い。18は外面ヨコハケ調整であり、凸帯が剥離している部分に1次調整のタテハケが残る。内面はナデ調整。焼成は硬質。21は外面はヨコハケ調整で、ハケの停止痕がみられる。また、凸帯の上面をハケでナデている。内面はナデ調整。24は外面はヨコハケ調整で、凸帯の下部に1次調整のタテハケがみられる。内面はナデ調整。焼成は17に近く硬質である。

図13－25は土層断面図の30層の黒色土からの出土である。円筒埴輪の体部の破片である。外面調整のヨコハケが認められるが、全体に磨耗している。

**その他の遺物（図14・15）**

図14－1～3は土層断面図の14・15層から出土した。1は土師質の姥口土釜である。2は瓦質土器で深鉢である。3は唐津系の茶碗である。図14－4～12は土層断面図の3・6・7・11層から出土した。4は瓦質の擂鉢。5は土師質の甕の口縁部。6も土師質の甕の口縁部で煤の付着がみられる。7は深鉢。8は瓦質の火鉢で口縁に波状文を施す。9は土師皿。10～12は陶器で10・11は茶碗、10は青緑の釉を施す。12は浅鉢と思われる。図14－13～19、図15－20～27は2層から出土した。13は白磁の碗の口縁部。14・15は陶器の茶碗。16は白磁の方形の皿で内面には削り出しによる雷文が施文されている。17はつまみをもつ蓋である。18・19は土師器で18は鉢、19は焙烙。20～24はくらわんか碗。25・26は茶碗であるがややコバルトの濃いもの。27は色絵の皿。図15－28～32は30層の遺物である。28・29はくらわんか碗の系統をひく。30～32は近代の茶碗である。

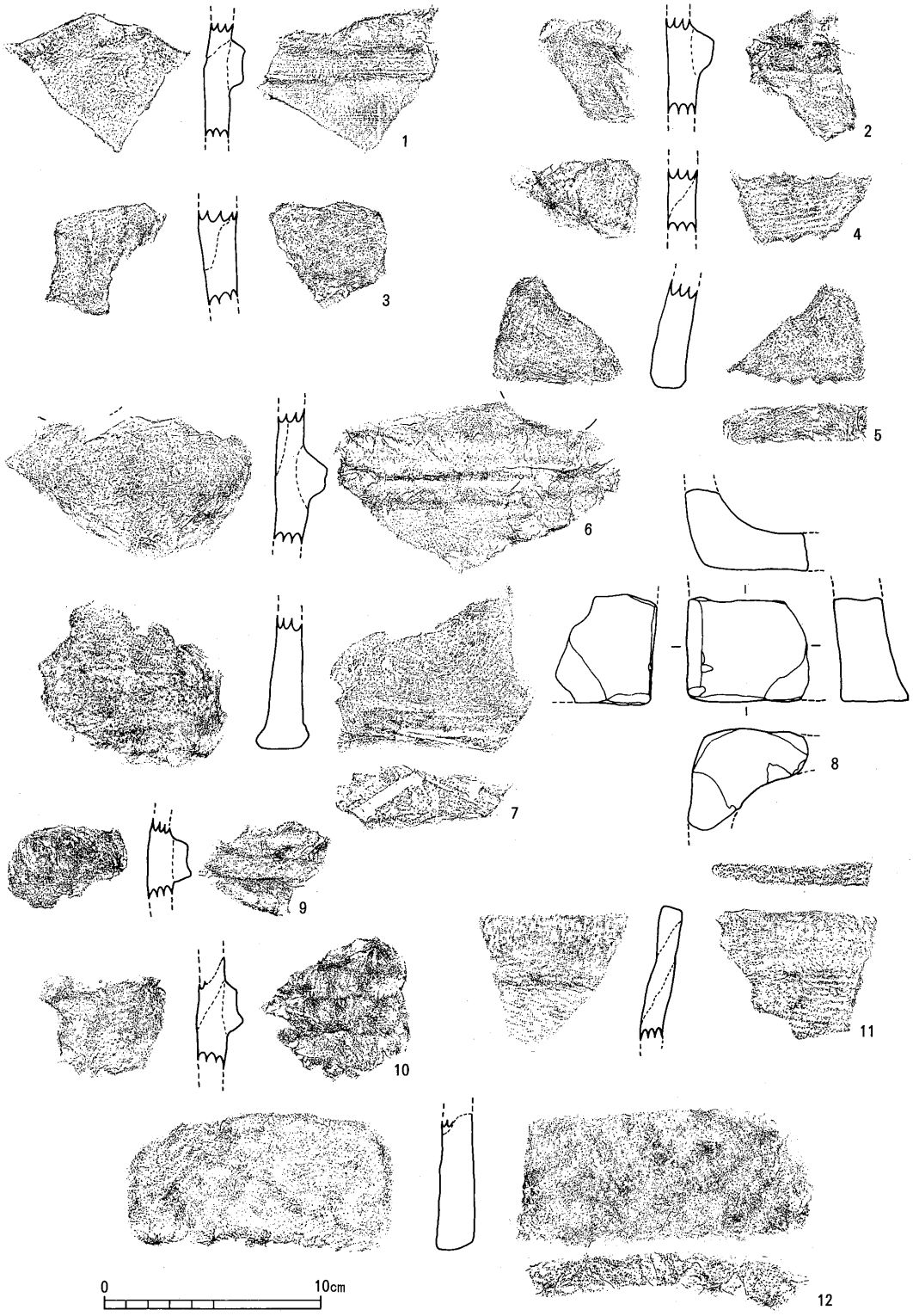



図12　川合大塚山古墳南トレンチ出土　埴輪１

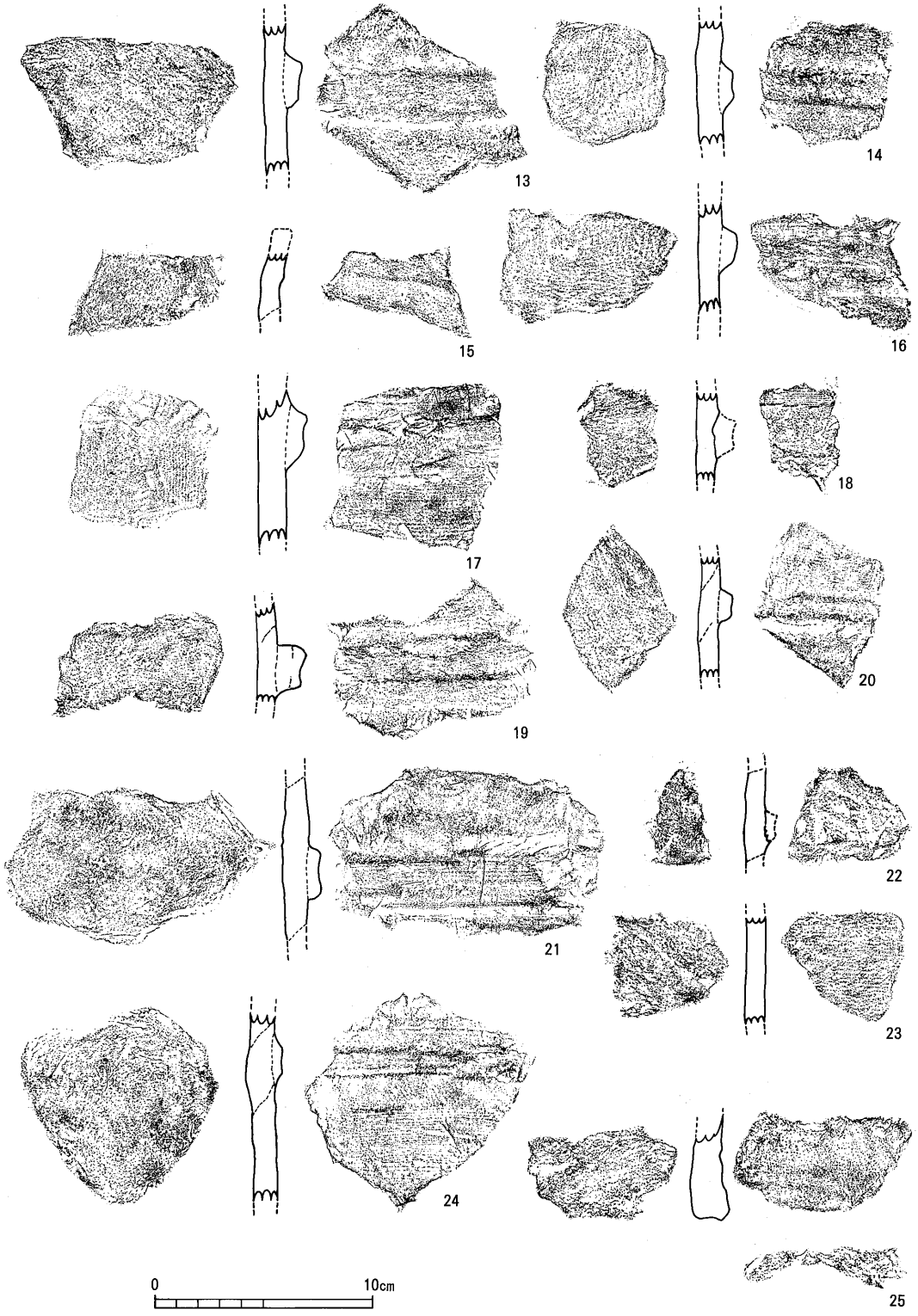



図13　川合大塚山古墳南トレンチ出土　埴輪 2

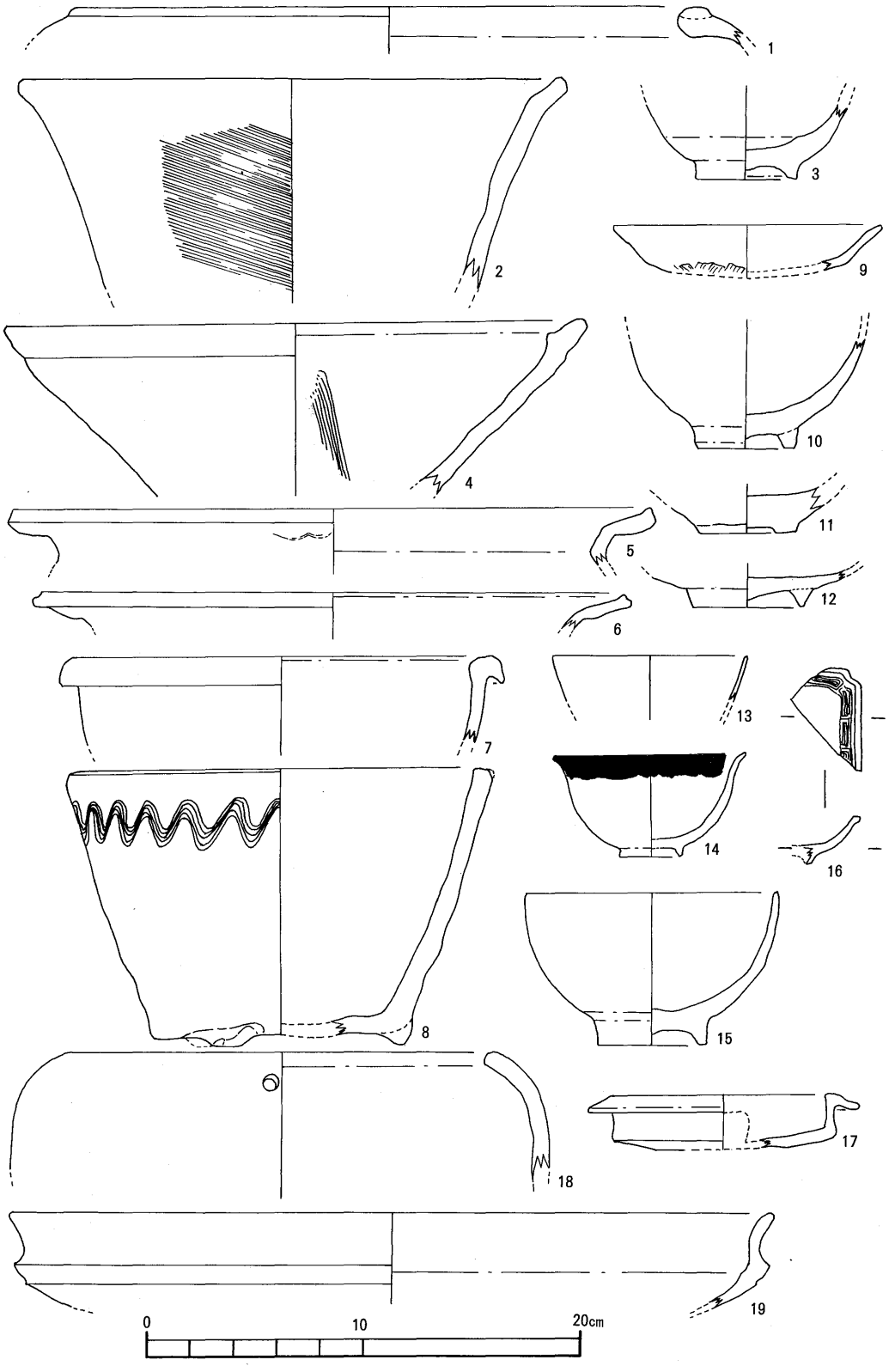



図14　川合大塚山古墳南トレンチ出土　その他の遺物 1

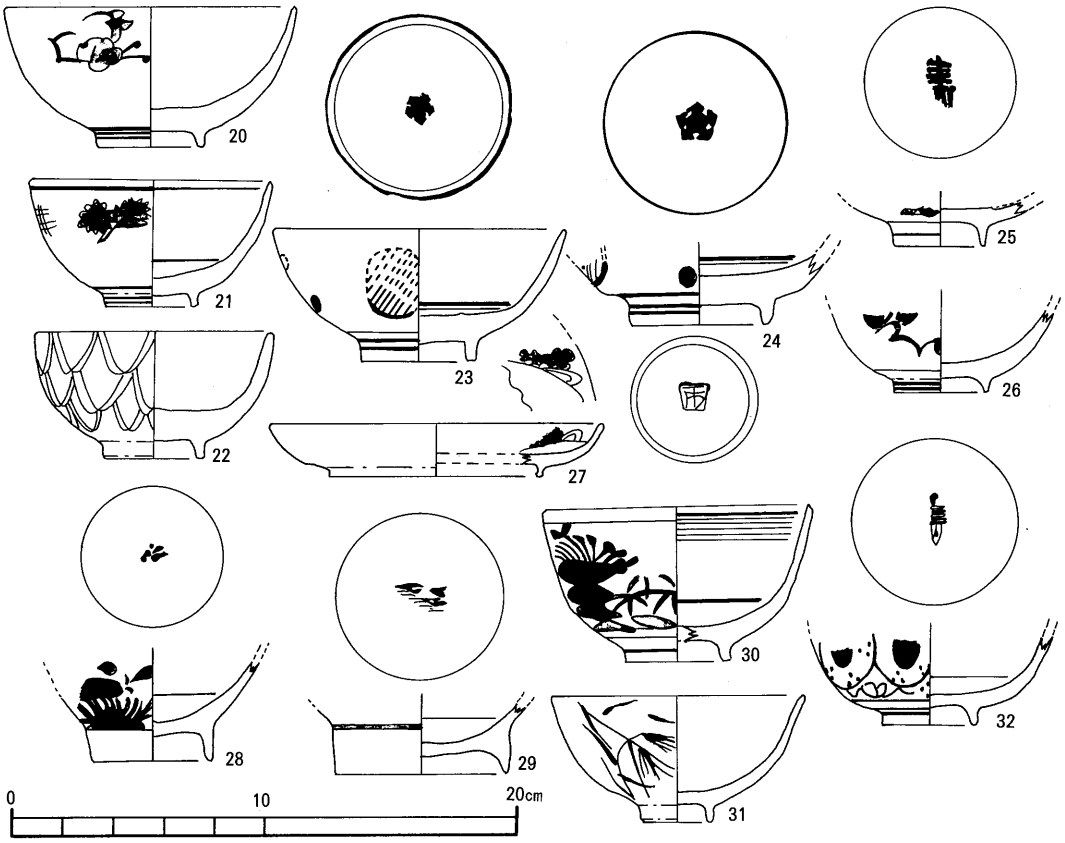



**図15　川合大塚山古墳南トレンチ出土　その他の遺物 2**

## まとめ

今回の調査で検出された落ちは、周辺の地形を勘案すると、本来の周濠の法面と考えるのが妥当ではないだろうか。このように考えると、先の『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報　第十二輯』掲載の測量図では周濠の東側の幅は西側より狭くなっているが、本来は同じ幅であったと言える。ただし、南トレンチは西側での現状の周濠の南側の法面ラインよりさらに南側になる。現状で周濠の南東部分は南に拡張されたようになっており、また、この拡張部分の南側にあたる下水道工事に伴う立会調査地では、掘削が 2 m程度の深さに及んでいるが、新しい時期の盛土であった。このことから、宅地部分の埋め立てが始まる中世には、周濠の南東部は南へ拡張された形であったと考えてよい。この周濠拡張部の形成が、古墳築造当初のものであるのか、後世の改変であるのかは調査の都合上、底面を広く掘削できなかったので、決定づけられなかったが、南トレンチで検出した埴輪破片のうち、法面の直上の層から出土したものには円筒埴輪の底部や形象埴輪の破片があり、かつ、他の層のものに較べてやや大きな破片である点から、周濠外に埴輪を樹立していたと推定でき、古墳築造当初から周濠の南東隅部は南に拡がっていたと考えてもよいのではないだろうか。

このような、周濠の突出部分は、川合大塚山古墳の北東側に存在する城山古墳においても認めら

れる。城山古墳においては、周濠の突出部分は3ヶ所認められる。このうち、昨年度に調査した北東側突出部[注]については、掘削時期やその意義は決定づけられなかった。川合大塚山古墳・城山古墳共に中世には城砦として利用されており、後世の古墳及びその周辺地の土地利用を検討していく必要があろう。また、川合大塚山古墳の北西に存在する中良塚古墳について、現状では周濠の北西部が突出する形になっているが、これは、その東側が現存する住居を建築する際に埋め立てられ、このような形になったものである。

注　『河合町文化財調査報告第6集　1991年度埋蔵文化財発掘調査報告』1992年

## 付記　－坂上氏寄贈大塚山古墳の遺物について－

1993年3月、斑鳩町在住坂上健一氏より、川合大塚山古墳及び中良塚古墳採集遺物の寄贈があった。これらの遺物は坂上氏が1976年春に川合大塚山古墳群を見学中に偶然の機会に露出していたものを採集され、長らく大切に保管されていたものである。そして、筆者と知り合ったのをきっかけとして“地元で保管し、活用して下さい”との意向で寄贈頂いたものである。これらの資料は埴輪がほとんどであるが、川合大塚山古墳の後円部墳頂南西部で採集されたものの中に2点の興味深い土師器破片（図16－1、2）がある。今回の発掘調査ではあまり良好な資料は得られなかったが、これら寄贈資料は川合大塚山古墳を考える上で貴重な資料であり、この土師器を中心にここに紹介する。

図16－1は須恵器でいうところの杯蓋のつまみ部分である。調整はナデであり、正円にはならずやや歪む。外面に赤色顔料が塗布されている。胎土は径1㎜以下の砂粒を含み密で丁寧な整形をおこなっている。また、同一場所で採集された埴輪のうちに細かい胎土のものがあり、それに近似する。

図16－2の胎土は1と同様である。調整はナデである。内面に赤色顔料が残るが外面には見られない。ただし、内面も部分的に赤色顔料が残るだけであるので、当初から塗布していないのかは不明である。器種は内面に赤色顔料が残ることから、杯もしくは有蓋高杯の杯身の破片と考えられる。体部は傾斜が強く杯としてはやや深くなる感じである。口縁部は体部の深さに較べて短く、やや内傾して立ち上がる。須恵器でいういわゆる受けの部分は機能を意識していないようで、下方に傾斜し、その上面は水平面を持たない。

この2点の形態は初期須恵器もしくは陶質土器の形態によく似ており、全体的なつくりは非常に丁寧である。初期須恵器もしくは陶質土器の形態を土師器の技法で表現したものであろう。また、採集位置が後円部墳頂である点から、主体部への供献土器としての性格が窺えよう。

図16－3は円筒埴輪の口縁部である。いわゆる貼り付け凸帯の口縁である。外面はヨコハケ調整、内面はタテハケの後ヨコハケを施している。さらに、口縁端面をもハケで調整し、稜線部をナデて仕上げている。全面に赤色顔料が塗布されている。

図16－4は形象埴輪である。表面は一定方向にハケ調整を施す。裏面は指ナデで粗く仕上げてい

る。両面共に赤色顔料が塗布されている。表面には線刻により施文している。文様とハケ調整が表面だけであることから、靫形埴輪等の飾り部分と考えられる。

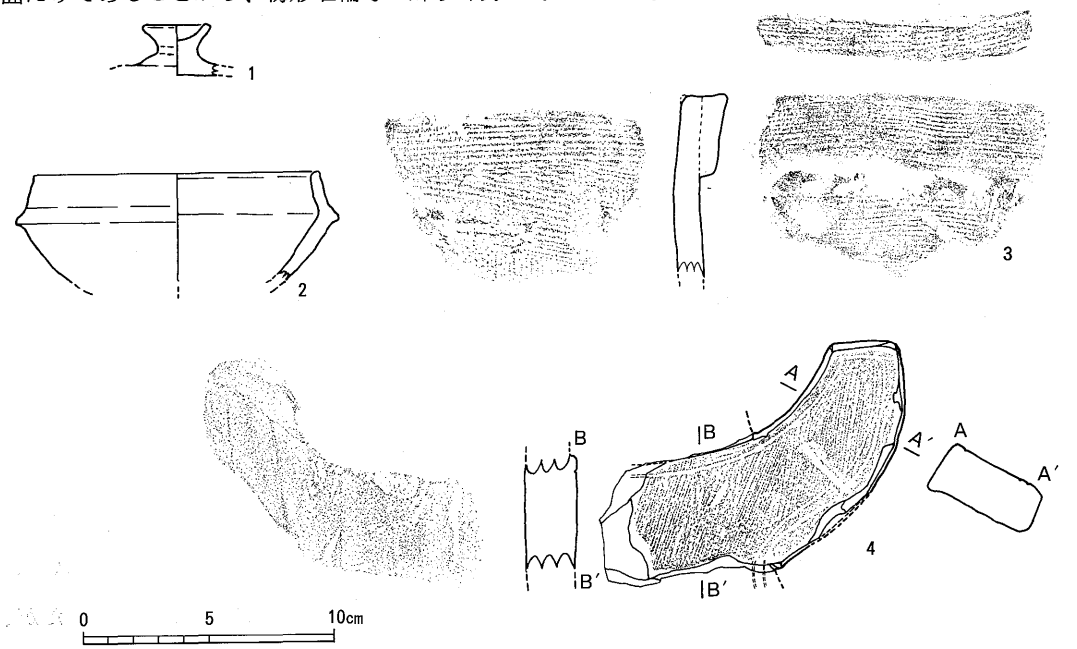



図16　川合大塚山古墳　坂上氏寄贈　土師器・埴輪

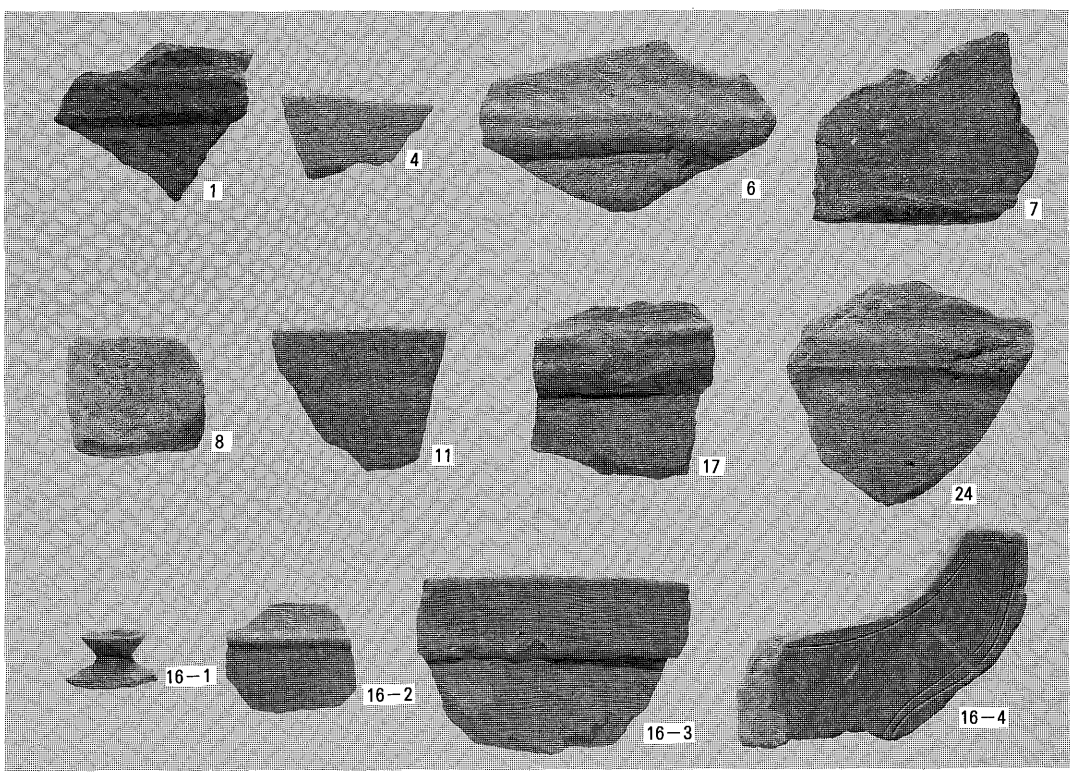
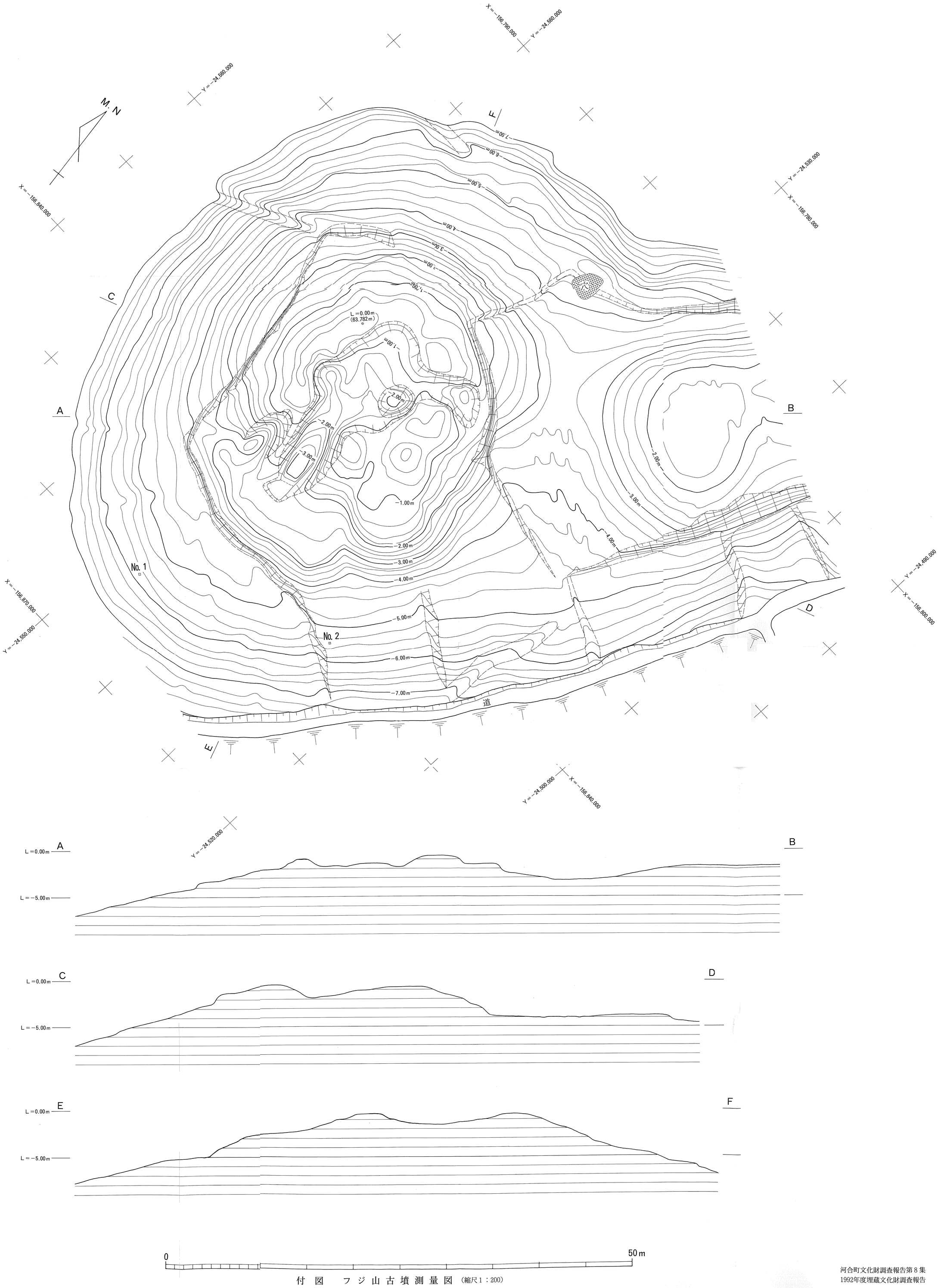



写真13　川合大塚山古墳南トレンチ出土　埴輪、坂上氏寄贈　土師器・埴輪




付　図　フジ山古墳測量図（縮尺1：200）

河合町文化財調査報告第8集
1992年度埋蔵文化財調査報告

## 河合町文化財調査報告

| | | |
|---|---|---|
| 第１集 | 佐味田宝塚古墳 | 1986年 |
| 第２集 | 史跡乙女山古墳　付高山２号墳 | 1988年 |
| 第３集 | 長林寺 | 1990年 |
| 第４集 | 河合町遺跡詳細分布調査報告 | 1990年 |
| 第５集 | 高山３号墳 | 1992年 |
| 第６集 | 1991年度埋蔵文化財調査報告（市場垣内遺跡・史跡城山古墳） | 1992年 |
| 第７集 | 穴闇～大型動物化石産出地内の発掘調査報告～ | 1992年 |
| 第８集 | 1992年度埋蔵文化財調査報告（本書） | 1993年 |

---


1992年度埋蔵文化財調査報告

－河合町文化財調査報告　第８集－

1993年３月31日

編集
発行　河合町教育委員会

奈良県北葛城郡河合町大字池部３

TEL　07455－7－0200

印刷　明新印刷株式会社


---